

「地域住民で作る 防災の輪」

～「顔が見える、声が聞こえる」地域へ～

出雲市 阿宮コミュニティセンター

1 阿宮地区の概要

阿宮地区は出雲市の東部に位置し、その南側を一級河川斐伊川が流れ、北方は城平山、仏経山などの山々が連なり、この山際に並行し斐伊川を眺望するように民家が点在している。

面積は約8k m²、8自治会、人口455人、133世帯が暮らし、高齢化率43%である。

平成19年には45haの圃場整備が完成し、大型機械を導入した稲作、ハウス栽培のイチゴ、花卉などが生産されている。

文化芸能は「阿宮神楽」「阿宮獅子舞」が保存会により明治初期から継承されている。

「阿宮」と言う地名は出雲風土記の「阿具の社」による由来とされている。

コミュニティセンターは、年間利用者がのべ6,600人もあり、地域の活動拠点として住民に親しまれている。

2 事業の趣旨

(1) 現状

ア 少子高齢化が進み、行事等ができなくなり、地域力が一気に低下することが危惧される。

イ 農作業が機械化したことから地区内の共同作業が減り、地域の付き合いが薄くなったと感じている。

ウ 近年、温暖化の影響と言われる未曾有の災害が国内外で発生し、住民の関心が高まっている。

エ 阿宮地区は直近で70年前に、壊滅的な災害に遭っているが、その記憶は薄れつつある。

(2) 安心・安全の人づくりのために

ア 災害が起きた場合、住民の命を守るための初動は、地域が担うと認識する。

イ 地区内にはレッドゾーン（土砂災害特別警戒区域）44箇所が指定され、危険な場所だという認識を共有する。

ウ 危険を予知することで、一人暮らしの高齢者などを早めに避難場所へ誘導する対策と、対応する人づくりを進める。

エ 消防団OB組織の「阿宮自主防災隊」と連携し、災害時の行政への情報提供と初動を主導する体制をつくる。

オ 防災以外の地域課題についても共有し、住民に何が出来るか打開策の検討と、リーダーの育成を図る。

3 具体的な取組内容

(1) 住民への呼びかけ

梅雨期が始まる6月に災害対策委員会が自治会長等に呼びかけ、防災事業の取り組みについて説明し、特にこれまで自治会活動への参加が少なかった女性の参加を呼び掛けた。



説明会の様子

(2) 防災先進地への視察

地域防災に積極的に取り組んでいる安来市「宇波地区」、非常時の住民対応にGISを活用している出雲市「須佐地区」へ、また、大震災において住民ができる

ことを学ぶため、神戸市の「人と防災未来センター」に出向き、早めの避難行動と、住民同志が日頃から気遣うコミュニケーションの大切さを再認識した。

(3) 防災マップの作成

ハザードマップでは、「自宅が分かり難い」、「過去の災害現場を知りたい」という声に反映するために、住民が集まって話し合い、自分たちの手で防災マップを作成し、危険箇所の確認と、住民の防災に対する当事者意識の向上を図った。

(4) 防災訓練の実施

住民参加型の防災訓練を通じて、要支援者を誘導する者の確認、一次避難場所の適性確認、一次避難場所と地区災害対策本部との情報伝達の手段、飲料水確保策の実践について訓練した。



防災訓練の様子

(5) 防災ワークショップと講演会

コミセン行事（大掃除）に合わせ、防災ワークショップ、防災講演会を開催し、防災に関する知識の習得と地域住民の防災意識の向上を図った。

4 評価と成果

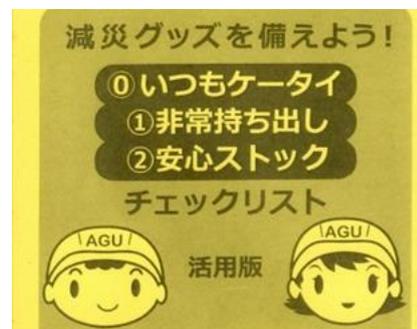
(1) 先進地域への視察研修では、女性の参加が40%あり、女性の視点で防災を考えなおすことができた。また、女性が参画し、日頃のコミュニケーションの重要性を再認識したことで、次年度2つの小サロン設立に向け準備が進んでいる。顔が見える関係づくりの継続的な取組につながった。



作成した防災マップ

(2) 島根県中山間地域研究センターの指導で、GISを活用した地区の防災マップを作成した。これにより地区内の水利、避難場所、特別警戒区域（レッドゾーン）を自覚できた。

(3) 地域住民の防災意識の向上



チェックリストを作成し全戸に配付

9月1日に実施した「防災の日」のアンケートは回収率が90%と高く、住民の防災に対する意識の向上が感じられた。また、非常持ち出しの準備についても各家庭に着実に広がっている。

5 今後の課題と見通し

- (1) 要支援者と支援する住民との連携体制が必須である。
- (2) 今回作成したハザードマップを有効に活用した防災訓練の計画の継続が必要である。
- (3) 今後は中学生、高校生の参加する機会をつくることで、地域とのつながりを深め、将来のリーダー育成に繋げたい。
- (4) 今後も、小さな取組を継続し、いざという時に助け合える「安心・安全」な地域を目指していきたい。

(文責：センター長 山田 勉)